

## “夏休み子ども科学相談”から考えたこと

人間関係行動学講座 助手 水間 玲子

NHK のラジオ番組「子ども科学相談」をご存知でしょうか。夏休みだけの特別番組であり、しかも高校野球が開催されている間は放送されないのだが、素朴な中にインパクトを醸し出しており、番組の歴史など全く知らない私であるが、知る人ぞ知る長寿番組なのではないかと勝手に推測している。

番組構成は至ってシンプルである。子ども（幼稚園生から小学生までがほとんどである）がその道の専門家（虫や動物に関する専門家、植物に関する専門家、宇宙のことにに関する専門家、などと紹介される）に対して疑問を投げかけ、それに対して回答をする、という構成である。番組のねらいとしては、おそらく、子どもの不思議にできるだけ答えてあげたい、子どもの好奇心を伸ばしていきたい、というところであろうが、むしろ、大人の方が楽しく聞いているように思う。実際、「楽しみに聞いています」と紹介されるお便りは、年配の方からのものが多い。

何が楽しいのか。なぜおもしろいのかといった方がいいかもしれないが、少なくとも二点あるだろう。一つは、その回答内容の専門性という点での知的水準の高さである。大人であっても、ほとんどの回答内容は「へえ〜」と思わせるものであり、勉強になったという満足感を得ることができる。しかも子ども向けに可能な範囲でわかりやすく説明されるので、素人にはありがたい。

そしてもう一つ。むしろコアなファンをひきつけているのはこちらだと思うのであるが、[質問する子ども vs 仲介するアナウンサー&回答する先生]というやりとりの妙である。どんなに専門的に優れた見解であっても、子どもとの対話が“ねじれの位置”になってしまうこともある。回答を聞きながら子どもは「はい」と相づちを打っていくのであるが、そのトーンが怪しくなってしまう瞬間、聴取者は勝手に応援してしまう。それまで元気に受け答えしていた子どもが、回答後のアナウンサーとのやりとりにおいて「夏休みの宿題終わりましたか」と聞かれてしまい、一瞬の沈黙の後に「はい」と頼りなく答え「ちょっと返事が小さくなってしまったかな」とそのまんまのツッコミをされていたこともある。さらには、子どものそばで「最後に『ありがとうございました』って言うんだよ」と必死でくり返しているおばあちゃんの声が回答者の声を遮るレベルでラジオで流れてしまっていたこともある。

つまり、教養と臨場感と人間味にあふれる、なかなか楽しい番組なのである。ご存知ない方は、是非来年の夏、聞いて頂きたい。

しかし、私は、この番組を聞いていると、子どもというものの、そしてそれに対する大人というものについて、いつもあれこれ考えさせられてしまう。私はいわゆる“子ども好き”ではない。知り合いの子どもはともかくとして、不特定多数の“子ども”というものを「かわいい〜」と思うことは稀であった。しかし、最近かわいいと思うようになってきている。特にこのラジオ番組を聞いていると、子どもという存在を無性に愛しく思ってしまう、大切にすべき存在だと感じてしまうのである。そういう自分に驚愕し、あれこれ思考してしまう

のである。この番組は、[子ども vs 大人] という図式における“大人”の側の認識を浮き彫りにするように思う。なぜ子どもの発言がおもしろいのか、なぜかわいいのか。大人、即ち、私自身、子どもに対していかなる意識をもっているのかを考えさせられるのである。

それは、電話がつながった時から始まる。アナウンサーは、まず、「こんにちは。お名前と学年を教えてください」と、子どもの名前と学年を尋ねる。続いて、どの地域からかけているのかを知るために、「どこからお電話してますか」と聞く。これはなかなかクセのある問いである。多くの子どもは「愛知県です」など、居住地をちゃんと回答する。それは、この番組に子どもが一人で電話をすることは殆どなく、大抵は近くに親や祖父母の誰かが付き添っているからである。だが、時に「お家からです」と答える子どもがいる。そのとき、私はつい、この子どもの答えに頬をゆるめてしまう。子どもらしく、微笑ましく思ってしまうのである。だが、実はこの設問自体がちょっとおかしい。この番組の流れに関する了解なしに答えられるものではないではないか。それなのに、このやりとりは、子どものかわいらしい間違いとして記憶されてしまうところだったのである。何か、それはとても理不尽なことに思う。本来、大人の側に不備があるのに、「子どもだから」ということで了解されてしまうことって、案外多いのではないだろうか。

自己紹介が終わると、本題である質問に入る。たとえば、地球の自転について、「なんで、誰も回してないのに、地球は回っているんですか」と切り込む。「誰も回していないのに」。ここに、彼なりの思考を垣間見る気がする。あるいは、「おばあちゃんのところに行った時、ヘビイチゴを食べたらお腹が痛くなる」と言われました。本当ですか。」という質問した子どもがいたのだが、彼女なりに「食べたらヘビが怒って、だからお腹が痛くなるんだと思ってた」という。このようなやりとりからは、彼ら／彼女らなりの世界をわかりたいという気持ち、そしてそのための思考過程が透けて見える気がし、その思考実験の場である脳みそを勝手に愛おしく思ったりする。と同時に、実は、ひどく共感したりもするのである。そこから、実は私たちもそのような思考実験を共有しているということ、しかし、それをあまり発言できなくなっていることに気づくのである。

なぜか。私たちがメタ的な思考を身につけてしまっていることが大きいと思う。メタ的な思考の体得、視点を相対化する能力の体得は不可逆的なものであり、そしてその中には、その後の行動を阻害するものがあると私は常々考えている。その体得以前には何でもなかった言動について、それを相対化してとらえる能力を身につけてしまったがゆえに、私たちは自由に行動する力を失う。その後には得られる解放によって得られる自由は、縛りを知る前に有していた自由とは明らかに違う地平に存在する。それ故、子どものまっすぐな問いかけやひたむきな思考過程は、子どもだけがもちうるものとして愛でられるのであろう。

なんだか、このラジオ番組を聞いていると、私たち大人は、少なくとも、子

どもを“子ども”としてとらえる大人は、子どもに対する一つの見方、いわば子どもステレオタイプを有して接しているということを改めて自覚してしまうのである。知らず知らず、子どもとはこういうものである、という意識が私たち大人には、ある。それがいいとか悪いとかいう話ではないし、正しいとか間違いであるとかいう話でもない。ただ、その概念化、ステレオタイプの形成は、何らかの意味で子ども時代を終えたからこそ可能な作業である。だからこそ、議論できるし、展望ももてる。ただし、そこには必ず多少の距離が存在する。対象化するとはそういうことである。この距離感を非常に自覚した夏であった。

